

元田 茂先生を偲んで

保坂 三郎

(財)熱帯海洋生態研究振興財団

大森 信

東京水産大学資源育成学科

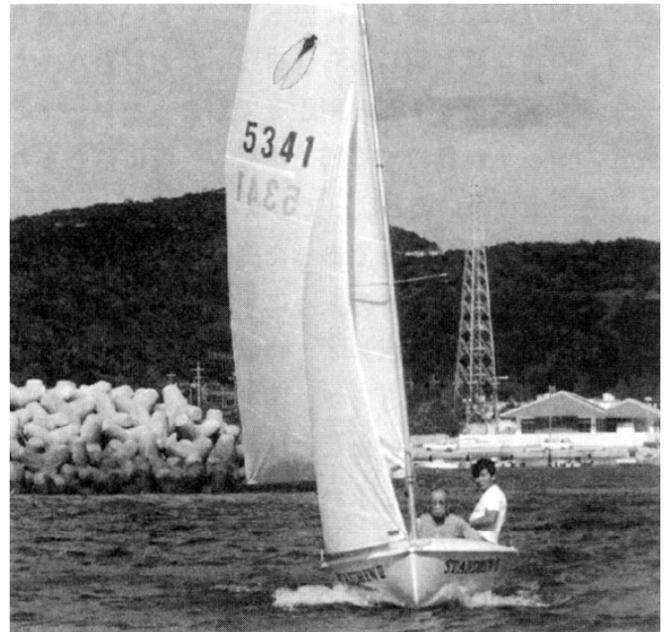
Tribute to the memory of Dr. Sigeru Motoda (1908-1995)

S. Hosaka · M. Omori

元田 茂 先生 (1908 ~ 1995)

熱帯海洋生態研究振興財団の設立当初から評議員として阿嘉島臨海研究所の活動を常に温かく支援された元田茂先生が 1995 年 9 月 24 日腎不全のため河北総合病院で亡くなった。87 才。追悼告別式は 9 月 27 日、東京都新宿区下落合の目白聖公会で行われ、620 名の参列者があった。

元田先生は明治 41 年 (1908) 1 月 10 日、宗教家で教育者の父元田作之進と母梯の次男として東京都で生まれた。昭和 8 年北海道帝国大学農学部を卒業し、昭和 10 年 6 月から同 12 年 6 月までと 13 年 8 月から 11 月まで、日本学術振興会が設立したパラオ熱帯生物研究所 (西カロリン諸島パラオ) に研究員として滞在された。そして帰国後、17 年に北大農学部助教授、同 25 年には函館に新設の水産学部教授として迎えられ、昭和 30 年 2 月から 16 年にわたって浮遊生物学講座を担当された。この間、関係分野で多数の子弟を養成し、日本プランクトン学会の創立 (昭和 43 ~ 53 年、会長) をはじめ、わが国の浮遊生物学や海洋生物学の発展に多大の貢献をされた。昭和 46 年に退官後、北海道大学から名誉教授の称号をうけられ、昭和 46 年 4 月から同 58 年までに東海大学海洋学部教授、同特任教授などを歴任されている。生涯に公表された論文は、造礁サンゴや動物プランクトンの生態学、採集器具に関するものなど百余篇があり、昭和 47 年には日本海洋学会賞が、また国際共同海洋調査や学会活動を通じてなされた国際的貢献に対して、昭和 62 年ソウルで開催された第 16 回太平洋学術協会の総会で、畑井新喜司メダルが授与されている。これは日本人として初めての受賞であった。



阿嘉島でヨットを楽しまれる元田先生

パラオ熱帯生物研究所は昭和 9 年に畑井新喜司博士らの尽力で建てられた。わが国のサンゴ礁研究が世界をリードするまでに高められたのは、元田茂、江口元起、安部襄、川口四郎、時岡隆、羽根田弥太、阿刀田研二氏等、この南洋の島の小さな研究所で研究に没頭した学徒の努力に負うところが大きい。多くの優れた成果を挙げた研究所は、太平洋戦争の激化によって、わずか 10 年足らずで活動を終えたが、2 年間のパラオ生活は先生にとって重要な青春だったらしく、研究を共にした人々の同窓会「岩山会」の中心となって、最後まで機関紙の発行などの世話をしておられた。私達は当時の話をうかがったり、スケッチブックに描かれた先生の水彩画や漫画を見て、島の 1 日の生活を思い浮かべたものである。それにしても、研究所跡に記念碑を建てたいとのご希望が実現されなかったのは残念であった。

先生は私達が昭和63年(1988)熱帯海洋生態研究振興財団を設立した時、阿嘉島臨海研究所の目指すところを一番喜んで応援して下さいました。そして財団の評議員になることを快諾され、また蔵書の一部を研究所に寄贈して下さいました。それは元田文庫として所員や外来研究者に利用されている。先生は阿嘉島にも美智子夫人らと共に三度訪れられて、南洋のサンゴ礁での経験を話され、阿嘉島臨海研究所をパラオの日々の続きのように思って、いろいろ提言された。有名な絵と同じくらいヨットがお好きだった先生は、北大ヨット部の創設者でもあったが、その先生のヨットが島のすぐ前で横転し、海に落ちられたことも今は思い出となってしまった。

寡黙なりベラリストであった先生は、人を差別しないことに徹し、全ての人々に平等の優しさをもって接された。権力を求めず、物欲と名誉欲にとらわれなかった先生の生き方が、国や出身校を越えた元田人気につながっていたことは言うまでもない。本当に多くの人々に惜しまれて去られた先生がパラオ時代になされた研究と、サンゴ礁と熱帯の海についての論文や報告の一覧表を終わりにまとめた。心からご冥福を祈りたい。

パラオ熱帯生物研究所での研究 (1935~1937)

滞在2年間に行った研究の題目は造礁サンゴと環境との問題で、パラオ岩山湾内数地点で2年間水中照度、サンゴの餌となる動物プランクトン量、微細浮遊物の量、造礁サンゴの繁殖深度限界の測定を行った。結論は浮遊細泥がサンゴの生育に最も影響を与えていることである。又ダーウィン以来問題となっている礁湖の成因に関し、礁湖と外洋の条件を1年間に亘って測定し、海水温度は外洋でやや低く、塩分はやや高く、透明度は著しく外洋で高く、動物プランクトン量は多いことを認めた。なお、礁上に生息する塊サンゴ1種につき、ポリプの増加率を3年間に亘って各年毎に数えた結果、成長度(ポリプの増加率)は群体の増大とともに低下することを認めた。又岩山湾の植物プランクトン量は明瞭な季節変化を示さないが、7月、9~10月、12月にかなり増加したのは、季節風と関係があるように思われる。之等のデータから後年(1969)海洋基礎生産量を計算してみたところ、岩山湾内 $0.08\text{gC}/\text{m}^2/\text{day}$ 、外洋 $0.04\text{gC}/\text{m}^2/\text{day}$ の結果を得た。

(1989年7月24日、元田先生自身の筆によるもの)。

1. 元田茂 1937. パラオ港沖の大型プランクトン量に就て. 南洋水産情報 No.2. 62-63.
2. 元田茂 1937. パラオ - エスピリットサントにて採集せるプランクトンに就て. 南洋水産情報 No.2. 63-64.
3. 元田茂 1937. パラオの鰐. 植物及動物 5(1), 131-138.
4. 元田茂 1938. パラオの鰐 (続編). 植物及動物 6(1), 83-86.
5. 元田茂 1938. 南洋産 Tridacnidae シャコ貝科の生態. 殻形其の他に就て. 札幌農林学会報 29 (141), 375-401.
6. 元田茂 1938. 塊状珊瑚 *Goniastrea aspera* Verrill の群体成長曲線予報. 科学南洋 1(1), 20-24.
7. 元田茂 1938. 生きた珊瑚虫は魚に喰われるか. 科学南洋 1(1), 29-31.
8. 元田茂 1938. パラオ南西離島航海記. 舵 7(8), 406-413.
9. 元田茂 1938. 一年間に着生せる枝上珊瑚 *Pocillopora damicornis ceslitosa* (Dana) の数と大きさ. 科学南洋 1(2), 17-20.
10. 元田茂 1938. パラオの有用貝類. 札幌農政学会報 30(146), 315-324.
11. 元田茂 1938. カヌーを尋ねて ミクロネシアの旅. 民俗学研究 4(2), 302-319.
12. Motoda, S. 1938. Quantitative studies on the macroplankton off coral reef of Palao Port. Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15(4), 242-246.

13. 元田茂 1939. 塊状珊瑚 *Goniastrea aspera* Verrill の幼生放出時期の観察. 科学南洋 1(3), 5-7.
14. 元田茂 1939. 礁原上細泥の酸素消費力. 科学南洋 1(3), 44-46.
15. 元田茂 1939. シャコガヒ *Tridacna gigas* (Linne) の幼貝. 科学南洋 1(3), 47-48.
16. 元田茂 塊状珊瑚 *Goniastrea aspera* Verrill の成長. 科学南洋 2(1), 26-30.
17. 元田茂 1939. パラオ本島ガラマドオ湾の予備的調査. 科学南洋 2(1), 30-36.
18. 元田茂 1939. 礁原上の海水条件. 科学南洋 2(1), 46-48.
19. Motoda, S. 1939. Submarine Illumination, silt content and quantity of food plankton of reef corals in Iwayama Bay, Palao trop. biol. Sta. Studies 4, 637-649.
20. Motoda, S. 1940. Organic matter in sea water of Palao, South Seas, Trans. Sapporo nat. Hist. Soc. 16(2), 100-104.
21. Motoda, S. 1940. A study of growth rate in the massive reef coral, *Goniastrea aspera* Verrill. Palao trop. biol. Sta. Studies 2(1), 1-6.
22. Motoda, S. 1940. Comparison of the conditions of water in the bay, lagoon and open sea in Palao. Palao trop. biol. Sta. Studies 2(1), 41-48.
23. Motoda, S. 1940. The environment and the life of massive reef coral, *Goniastrea aspera* Verrill, inhabiting the reef flat in Palao. Palao trop. biol. Sta. Studies 2(1), 61-104.
24. Motoda, S. 1941. Plankton productivity of Iwayama Bay in Palao, South Seas. Palao trop. biol. Sta. Studies 2(2), 219-238.
25. 元田茂 1949. トコベイ・ソンソル旅行記. 科学南洋 2(2), 44-63.
26. Motoda, S. 1969. An assessment of primary productivity of coral reef lagoon in Palao, Western Caroline Islands, based on the data obtained during 1935-37. Rec. oceanogr. Wks Japan 10(1), 65-74.
27. Yamada, T. and S. Motoda, 1972. Latitudinal variation of armoured dinoflagellate populations from 5 ° N to 25 ° N on 142 ° E in winter. The Kuroshio . Proc. 2nd CSK Symp. 1970, Tokyo. 219-223.
28. Motoda, S., K. Azechi, T. Narumi, T. Sawada and C. Seki, 1973. Preliminary notes on the distribution of some zooplankton groups in the sea south of Java Island. Jour. Mar. Biol. Ass. India 14(1), 109-114.
29. 池田勉・元田茂 1977. 西部北太平洋の亜熱帯・熱帯海域と亜熱帯海域の二次生産力の比較. 第 6 回日ソ合同水産増殖シンポジウム. 1977. ソ連グルジャ, バトーミ, 1-9.
30. Ikeda, T. and S. Motoda, 1978. Estimated zooplankton production and their ammonia excretion in the Kuroshio and adjacent seas. Fishery Bull. 76(2), 357-367.
31. 元田茂 1990. 臨海実験所雑感. みどりいし (1), 8-11.
32. 元田茂 1991. 石サンゴの研究. みどりいし (2), 1-3.
33. 元田茂 1992. パラオのヒトデについている橈脚類. みどりいし (4), 28-29.
34. 元田茂 1994. パラオの外洋と礁湖の一次、二次生産の試算. みどりいし (5), 5-8.

